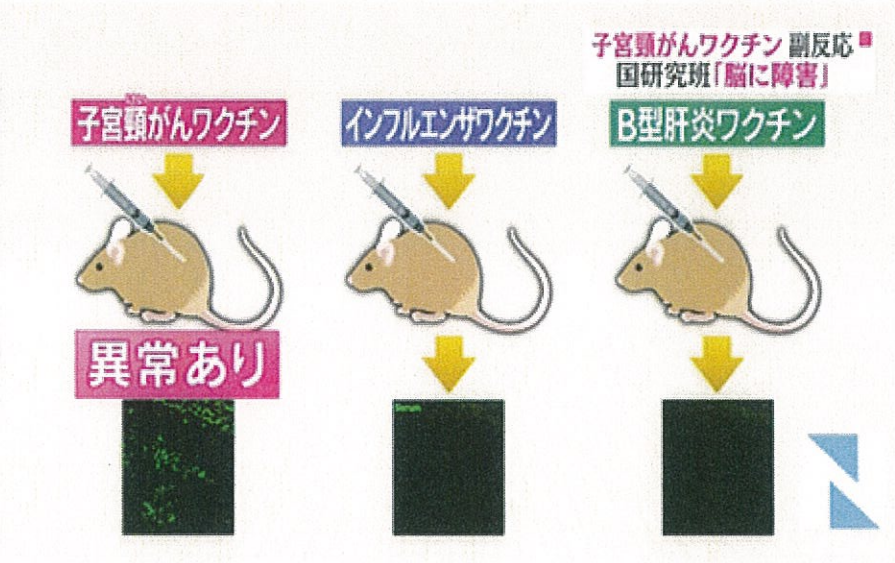
甲第 2 号証

WEDGE Infinity
日本を もっと、考える

子宮頸がんワクチン研究班が捏造
厚労省、信州大は調査委設置を
利用される日本の科学報道（続篇）

2016年06月23日（木）村中璃子 （医師・ジャーナリスト）

3月16日夜、TBSのNEWS23では「“子宮頸がんワクチン”と示された写真だけが緑色に光る画像」が映し出された。ある実験に用いたマウスの脳切片の画像である。



TBS NEWS23

信州大学第三内科（脳神経内科）教授（兼副学長、兼医学部長）の池田修一氏が班長を務める厚生労働研究班は、子宮頸がんワクチンが「自己免疫」というメカニズムで少女たちの脳神経に障害をもたらす、という仮説に立って研究を進めていた。自己免疫とは本来は異物を攻撃する免疫が自分を攻撃してしまうこと。NEWS23の画像は、その日の午後、厚生労働省で行われた成果発表会で池田班が用いたスライドを元にしたものである。

池田教授はNEWS23に対し「明らかに脳に障害が起こっている。ワクチンを打った後、こういう脳障害を訴えている患者の共通した客観的所見が提示できている」と語った。3月16日の発表直後、筆者は池田教授にマウスの数、ワクチンの投与量など、スタディのデザインや条件を詳しく教えてくださいと問い合わせた。すると、池田教授は「マウスの実験は私ではなく、信州大学の他の研究者が

発案して実施しております」と責任の所在を濁し、「詳細は研究のオリジナリティと論文作成のためお話しすることはできません」と、一切の回答を避けた。

“他の研究者”とは誰なのか。

周辺取材を重ね、それがこの４月に信州大の准教授から関東圏の新設大学の教授職に転出したＡ氏であることを突き止めた。

実験担当者の供述

去る６月３日、再三再四の申し入れに対し、ようやく取材に応じたＡ氏は、耳を疑うような発言をした。

「他のワクチンを打ったマウスでも緑に染まりますよ」

Ａ氏が語ったことの詳細は、Wedge7月号をご覧頂きたいが、そのポイントをまとめると次のようになる。

１．示された画像は、子宮頸がんワクチンを打ったマウスのものではなく、遺伝子異常のある特殊なマウスに、ヒト換算で100倍もの量のワクチンを接種して採取した血清（血液の液体成分）を、正常マウスの脳にふりかけて得たものであった。

２．使用したのは、飼っているだけで数カ月もすれば加齢により神経細胞死が生じる特異なマウス。また、ワクチンを打っていなくても自己抗体（異物ではなく自分を攻撃する異常な免疫）が生じるマウスであった。

３．つまり、光っていたのは脳に反応して沈着した自己抗体ではなく、異常マウスから採った血清に含まれていた自己抗体。そのため、子宮頸がんワクチン以外のワクチンでも、また生理食塩水であっても、強く緑に光る画像はいくつもあった。

４．子宮頸がんワクチンだけが光った画像とグラフは、数あるマウスの脳切片の1つ（N＝1）にたまたま起きた状態である。科学的な意義は限りなくゼロに近い。しかし、池田教授はこの組み合わせのスライドだけを選んで公表した。

５．この実験の結果がどうであれ、子宮頸がんワクチン接種後に脳神経障害が生じているとする少女たちの症状に結び付けて考えることは一切できない。

別のマウスに"ふりかけた"

人間には血液脳関門（blood-brain barrier、 BBB）と呼ばれる、脳の神経細胞を有害な物質から守るための関所のような組織がある。血管は人間の体に様々な物質を運ぶ役目をするが、生命の中枢である脳だけは、血管との間に強固なバリア機構があり、血管が通っているからと言ってどんな物質でも脳に届くわけではない。

脳の障害を疑うという子宮頸がんワクチン副反応問題でも、ワクチン薬剤が本当にBBBを越え、脳に何らかの影響を及ぼしているのかが最大の争点となっていた。

しかし、実験では、もともと極めて自己抗体のできやすいノックアウトマウスに、子宮頸がんワクチンをはじめとする各ワクチンを接種し、血清（血液の液体成分）を採取。その血清を、別の正常マウスの脳切片にふりかけて撮った画像なのだという。

実験者は、ワクチン薬剤がそう易々とBBBを越えないことは十分承知していたのだろう。

そのため、自己抗体を生じさせた別の異常マウスからわざわざ血清を採取し、正常なマウスの脳切片にふりかけたのだ。

実験で投与したというワクチン量の50マイクロリットル。これは、換算するとヒトへの投与量の100倍以上だ。一体何がしたいのか。

投与量については、Wedge7月号（6月20日発売）にマウス実験の記事を発表した後に、A氏に改めて質問をしたが、納得のいく回答は得られなかった。

チャンピオンデータは科学か

他のワクチンでも強く光っている写真がたくさんあったのに、池田教授は、子宮頸がんワクチンでよく光っている写真と他のワクチンで光っていない写真が組み合わさったスライドだけを発表した。

しかも、この発表データは、写真もグラフもサンプル数１。つまり、数いるネズミのうち、仮説にとって都合の良い、たった1匹についてのデータ＝チャンピオンデータであった。

チャンピオンデータとは、言ってみれば「100人に１人」しか成功しないダイエット法で減量に成功した一個人のデータや写真のようなもの。そこには再現性も統計的意味もない。チャンピオンデータは、科学ではなく宣伝である。

そのため、科学で「ネズミ1匹」の解析データが示されることはないし、やってはならない。

NEWS23での池田教授の言葉を聞いた視聴者は、誰もが「子宮頸がんワクチンを接種したマウスの脳だけに異常が起きていた」と理解したはずだ。

しかし、この実験では、ワクチンがワクチンを打ったマウスの脳に障害を起こしていたことにはならない。ましてや、少女たちの症状と結び付けて考える根拠はひとつもない。

Ａ氏とのやり取りは次の通りだ。

筆者「TBSのニュース23で池田先生が何て言ったかというのを読み上げると、明らかに脳に障害が起きていて…」
Ａ氏「起こらない！」
筆者「こういう脳障害が起きている患者の共通した客観的な所見が提示されている」
Ａ氏「ない！ですね。ぜんぜん」

筆者「今後、仮にこの実験が完成したとしても、子宮頸がんワクチンを打った少女の脳に障害が起きている話と結びつけるには飛躍がありますよね」
Ａ氏「飛躍はあるし、リンケージ（関連）はないですよ、何もないですよ！」

筆者「子宮頸がんワクチンによってできた自己抗体が、ワクチンを打ったマウスの脳に沈着したということにもならないですよね？」
Ａ氏「その証拠は取れていません」

明らかな意図

池田教授がいいデータを出せと指示したのか。Ａ氏自らがチャンピオンデータを出したのかーー。Ａ氏によれば、実験について池田教授に説明したのは昨年12月28日の1時間ほどの一度きりだという。

Ａ氏とは、池田教授への説明に使ったという、Ａ氏の立場を証明することになるオリジナルのスライドを見せてもらう約束で別れた。

しかし、「今日中に送ります」と言ったスライドは翌日になっても届かず、リマインドのメールを送っても返事がない。非通知でかけた電話にやっと出たが「確認して送るところです」と言ったきり、連絡がつかなくなった。最終的には、編集部からの電話を「出す必要ない」とだけ言って一方的に切ったという。

A氏は、N=1であることも、脳切片と血清の出所が別であることも、他のワクチンでも緑色に染まることも、問わなければ答えなかった。

ではなぜ「飛躍があり、リンケージもない」とA氏自らが認める実験が、計画され、実施されたのか。

そして、何百万人という人が視聴する主要ニュース番組を通じて、池田教授があのような発表を行ったのか――。

不自然な実験内容、池田教授のテレビでの表現、すぐ出せるはずのオリジナルスライドを一切出さなかったことなどを総合すると、これは「子宮頸がんワクチンを打ったマウスの脳に障害が起きた」と言うために造られた実験であり、“捏造の意図”があったと結論付けざるを得ない。

辞任でうやむや?

本誌ウェブWedgeInfinityで「子宮頸がんワクチン薬害研究班に捏造行為が発覚 利用される科学報道（後篇）」が公開された翌6月18日、池田教授の地元、長野県飯田市では、信州大学第三内科の同窓会が行われた。冒頭の挨拶で池田教授は、なぜか「お叱りを受けた」という言葉を繰り返しながら、自らの去就について述べた。

その内容は、ウェブ記事公開の2週間以上も前の5月下旬、「同窓会員の皆さまへ」というタイトルで医局員宛てに送られたメールとほぼ同じで、近く第三内科の主任教授と医学部長を同時辞任するつもりであるというものだった。

池田教授は2度の挑戦で医学部長となり、学長選に立候補して敗れ、副学長となっている。メールが送られてきた5月下旬、あれほどまでに執着して就任した医学部長を任期前に辞めると言いだした池田教授に一体何があったのかと医局内は騒然としていたという。

この問題が明るみに出る前から辞任の意を表明していたという池田教授。信州大学には、ガバナンスの甘さが深刻な問題を生んでいる現状を自覚し、池田教授が辞任してしまう前にしっかりとこの問題を追及し、信頼を取り戻してほしい。

大学の信頼だけでなく、アカデミア全体の信頼のためにも、だ。

池田教授は、医学部長で副学長であるだけでなく、数千万円の税金を使いながら子宮頸がんワクチン副反応問題という、公衆衛生行政の要である“定期接種ワクチン”の研究を行っている厚生労働省指定の研究班の班長である。

子宮頸がんで失われる日本人女性の命は年間約3000人。

命に責任を持つ仕事をする医師の1人として、HLA型（関連記事）もマウスも「知らなかった」「勘違いだった」「予備段階の実験だった」では済まされない。

また、「論文に出したわけではない」「メディアが報じただけ」という弁明も通用しない。成果発表会より前に、論文をはるかに上回る社会的インパクトのあるTBSの取材をわざわざ受けたのは池田教授自身だ。

当事者たちに反省なし

池田教授の言動は、アカデミアに不正問題に迅速に対応する制度がないことや、科学が分かりにくいことを上手に利用した、科学者として許しがたいものである。

このような医師・研究者を、雇用している信州大学や、研究班長に指定して税金を使って研究を行わせてきた厚生労働省は、調査委員会を設置して、直ちに調査に入るべきだ。

ウェブへの転載にあたり、Ａ氏に追加の質問と、抗議や加筆すべき点を訊ねるメールを送った。Ａ氏からの返信は以下のとおりだ。

村中先生
御世話になっております。
私といたしましては、先日御会いした際、御話しをした内容が真実で、だいたい全てです。信州大学医学部産婦人科講座といたしまして、「子宮頸がんワクチンの接種」には賛成です。ただ、ごく一部で、同ワクチン接種後に、副作用が認められます。これが、何かしらの遺伝的素因が原因かもしれません。
ですので、自己免疫疾患の素因を有するマウスを用いて検討を行っておりますが、まだ、パイロット実験の状態で、有意差を認められるような結果は得られていません。将来、何かしらの情報が得られれば、医療機関で同ワクチン接種の際、付加コメントが出

来れば良いかと思っています。宜しく御願い致します。
A

Wedge編集部は7月号発売直前の6月17日、厚労省担当課に記事の内容を説明しに行った際に、池田修一教授から厚労省に対し電話が入ったと耳にしたという。

「ウェッジは人権侵害である」と池田教授は言ったそうだ。

編集部は、「このような方が副学長、医学部長の任にあることは大きな問題であると考えます。大学として何らかの措置をとられるべきではないかと存じます」との手紙を添えて、信州大の学長宛てにWedge7月号を6月17日午前着の宅配便で送付している。学長に呼び出された池田修一教授は、このような手紙を学長に送ることは人権侵害だと言っているらしい。

記事で問われた実験内容については一切のコメントなく、人権侵害だという怒りの電話をなぜか厚労省にかける池田修一教授。何が人権侵害なのか不明だが、万が一そうだとしても、言うべき相手は編集部だろう。

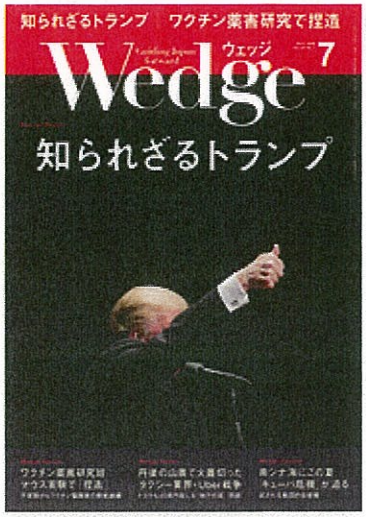
編集部は、池田修一教授にも同日着でWedge7月号を届けている。「先日は当方の取材に対して誠実なご回答がいただけませんでしたが、どういうお考えでこのようなことをなさったのか、ぜひ改めてきちんとお答えいただけないでしょうか」という手紙を添えて。

まもなく1週間が経つが、池田教授からリアクションはない。

それぞれの立場と動機から、捏造に手を染める研究者たち――これが国費を投じた子宮頸がんワクチン薬害研究班の実態だ。子宮頸がん罹患リスクを負ったワクチン未接種の少女たちとワクチンに人生を奪われたと苦しむ少女たちの未来は、こんな大人たちの手に委ねられている。

Facebookでフォロー Twitterでフォロー メルマガに登録
▲「WEDGE Infinity」の**新着記事**などをお届けしています。

◆Wedge2016年7月号より



株式会社ウェッジ

Copyright(c)1997-2016 株式会社ウェッジ All Rights Reserved.